

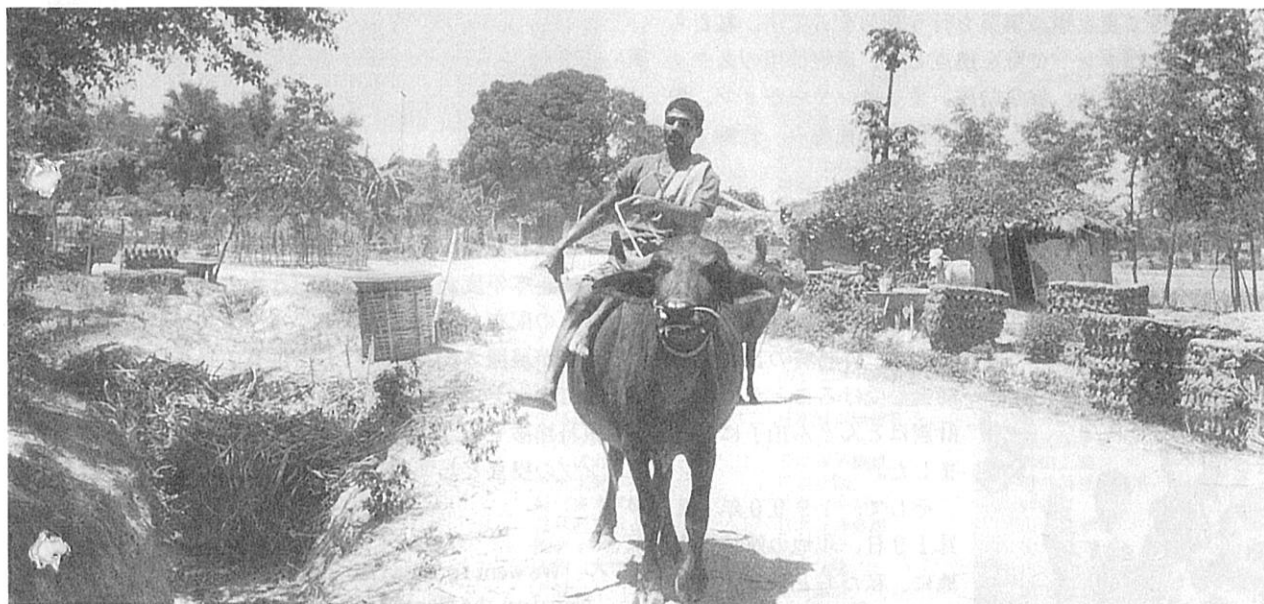
LIGHT_{OF} LOVE

Overseas Project for the Blind - Plans and Reports

No.6 1991.7

愛の光通信

東京ヘレン・ケラー協会 海外盲人援護事業事務局



A blind young man riding on the back of a water buffalo (Bara District, Narayani Zone, Nepal)

「水牛おじさん」とは言っても25才の盲青年

水牛の世話を仕事としているが

彼は牛を川に連れていくのではなく

悠然と水牛の背に乗り連れて行ってもらうのだ

水牛の背にヒラリと飛び乗る動作はまさに神業

神の乗りものであるはずの牛が彼の意のままに歩きはじめる

バラ C B R センターの建設

Construction of the Bara CBR Center

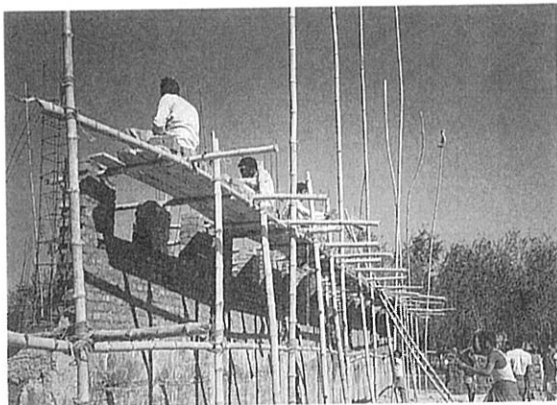
私たちは、1989年からネパール盲人福祉協会（NAWB）と共同で、ネパール王国南部インド国境沿いのナラヤニ県バラ郡において、視覚障害者のためのCBR事業を行っています。

CBRとは、コミュニティ・ベースド・リハビリテーションの略で、障害者が居住する地域社会で自立した生活を営めるように、そのコミュニティの協力を得て更生援護事業を行うシステムです。私たちはバラ郡カレーヤ町を拠点とし、現地採用のスタッフ7名と共に、就学助成、オリエンテーション、歩行・日常生活訓練、家畜の飼育、縄編み、竹細工などのプログラムを行っています。

この事業をさらに推進するために、私たちは現地に「眼科診療所」を付属したリハビリテーションセンター（CBRセンター）を建設するための計画を立てました。幸い現地の篤志家から建設用地の提供があり、外務省のNGO補助金も受けることができ、計画はとんとん拍子に進みました。

そして、1990年12月19日、現地の建設予定地に、私たちと日本大使館の担当者、現地の教育長などの教育・福祉関係者、盲人協会代表、眼科医など70名あまりが集い盛大な地鎮祭を開きました。

その後、現地コミュニティの大規模な勤労奉仕により、このセンターは3か月間の突貫工事で完成しました。敷地面積は1,090㎡、建坪275㎡、延坪360㎡。郡庁所在地とはいえタライ平野の典型的な田舎町においては、これでもモダンでまぶしい白亜の殿堂です。1階は、訓練や講習会を行う多目的ホール



とCBR事務所、それに眼科診療所。2階は二部屋のベッドルームです。

落成したばかりのこの建物をCBR事業の拠点として、本年度から失明防止のための講習会やビタミンAの配布、バラ郡全域にわたってリハビリテーションが展開されます。なお、付属の眼科診療所では、隣町のケディア眼科病院から定期的に医師が巡回し眼科検診を行うほか、開眼手術のためのアイ・キャンプの拠点としても使われます。

We went to Bara District in the southern part of Nepal on the Nepal-Indian border in 1989 to begin a Community Based Rehabilitation (CBR) project for the blind.

In order to promote this project we built and began operation of a CBR Center, with an Eye Clinic attached to it. The area of the building is 275m², while the floor space is 360m². The first floor has a multi-purpose room for training and lectures or meetings. The CBR headquarters are also on the first floor. There are two bedrooms on the second floor.

CBR activities are the main function of this building which has just been completed. From this year we are giving lectures about how to prevent blindness, distributing Vitamin A, and carrying out rehabilitation training all over the Bara District.

Doctors come for short terms from a large eye hospital in the nearby town of Birganj. Besides giving eye examinations and performing cataract operations, the building is also used for eye camps.



The ground-breaking ceremony

NAWB点字出版所建設計画

Planning for the NAWB Braille Printing House

私たちは1987年にネパール盲人福祉協会（NAWB）に対して、点字印刷設備と点字用紙、点字亜鉛原板などの資材一式を贈りました。これをNAWBはカトマンズ本部の一角に設置し、ネパールの点字教科書を製作するための点字印刷所を開設しました。その後、私たちはさらにもう一組の印刷機材を贈り、現在順調に点字教科書をネパールの盲児のために無償配布しています。

ところで、NAWBの現在の建物は、国家から廃寺を譲り受けて使っているため、老朽化がはなはだしく劣悪な環境です。そこで、私たちは、すでに自然倒壊している回廊の跡地に、とりあえず点字出版所を新築する計画をたてました。

計画では同地に、レンガ作り2階建て延坪210㎡の瀟洒な建物が、1993年の3月までに建設される予定です。1階は、当協会が既に贈ったミニバスとジープを格納するための車庫と、点字製版・印刷室、トイレ。2階には、編集室と録音製作室が設けられます。着工は1991年の6月、総建設費は約600万円です。

老朽化の著しいNAWB本部

The NAWB Headquarters in Kathmandu Badly in Need of Restoration

カトマンズの中心街は一国の首都とはいえ意外と小さく、東西・南北共に4km程度。ぶらぶら歩いても通りすぎてしまいます。この街の南のはずれ、バグマティ川のほとりにNAWBはあります。目の前の道路にはトロリーバスが走っており、隣の建物は



The picture above is of the current NAWB headquarters. Located in the front gallery of the next-door stupa, the Braille printing house has just been built. The ground-breaking ceremony was held on 21 June 1991 and work begun. This printing press produces braille textbooks as well as providing other kinds of information to the blind.

交通警察の本部、向かいにはブルースターという高級ホテルです。交通の要所に面しているため、足回りの悪い視覚障害者にとっては最適の位置といえます。

しかしNAWBは、既に使われなくなった中世のヒンズー教寺院を利用しているため、上下水道の設備が無く、窓にはガラスもはまっていません。階段は、急傾斜のはしご段で、近代設備の搬入を拒んでいます。なにより、自然倒壊を危惧されるような危険な状態です。

私たちは、NAWBの要請を受け、既に倒壊して礎石だけを残している回廊部分に、ストウパ（仏塔）を避けるようにして、点字出版所を建設する計画です。

亜鉛板から塩化ビニールへ

従来、点字製版の原板は、洋の東西を問わず亜鉛板（ジンク・プレート）に決まっていた。しかし、この金属板は高価でひどく重たいのです。

これに代わるものとしては、塩化ビニール製のプレートがあります。しかしこのビニール板に点字を打ち、プレスするためには、さらに高度な職人芸が要求されます。ネパールへの技術移転を疑問視する声も無かった訳ではないのですが、私たちは挑戦してみることにしました。何より価格が半以下で、重量が1/3に減るのです。

私たちは、200枚のビニール板を持って、現地に乗り込み、製版機と印刷機の調整を行い、東京で手作りしてきた補助器具を取りつけました。短期間の訓練でどこまで技術移転できるか多少の不安もありましたが、完璧とは言えないまでも充分満足できる内容でした。

消耗資材は本来、現地調達が最も望ましい姿なので、今後はメイド・イン・ネパールの素材を使った製版・印刷技術の開拓も研究課題だと考えています。

ネパール盲人福祉協会メンバー

「IFLAアジア・セミナー」に参加！

1991年1月25から31日の日程で、国際図書館連盟（IFLA）、日本盲人社会福祉協議会、日本図書館協会主催の「IFLAアジア・セミナー」がアジア他18ヶ国の参加を得て、東京大学安田講堂を主会場に開催されました。このセミナーに当協会のパートナーであるネパール盲人福祉協会（NAWB）から、副会長のルバケティ氏、事務局長のバハディ氏（全盲）が招かれ1月22日に来日しました。

このセミナーの目的は、「紀元2000年までに世界中の誰もが読み書きできるように」という国際識字年のスローガンをふまえ、アジアの途上国に住む視覚障害者の読書と識字を推進すること。先進諸国の最も発達した視覚障害者サービスを紹介することにより、困難な条件の中で努力を続けているアジア諸国が、それぞれの国に最も適した方法論を模索し学びとるための1週間でした。

26日の公開セッションでは、「アジアの視覚障害者の識字と日本の役割」と題して、日本図書館協会会長・元文部大臣永井道雄氏が記念講演を行ない、続いて参加国からのレポートがありました。

NAWBのメンバーは、このレポートのなかで、ネパールの識字率が30%にしか達していないこと、首都のカトマンズにすら視覚障害者が利用できる図書館はなく、情報提供のシステムが未だにできていないことなどを訴え、ネパールにおける点字図書館設立のための財政的支援を呼びかけました。

他の途上国との情報交換などを含め、このセミナーが、ネパールの将来にとって大変意義あるものであったことは疑う余地がないようです。



当協会はすでに、点字出版システムをネパールに導入し、点字教科書配付事業を支援していますが、次の課題として図書館による情報提供をも考えなければならぬと感じています。

セミナーが開催されるまでの3日間、かれらは、当協会の鍼灸臨床実習・点字出版・録音製作、NHK「盲人の時間」の収録現場、施設の職業訓練、盲学校などを見学。予想通り、点字ワープロなど視覚障害者用コンピュータ機器類に、とくに興味を示していました。

ネパールはビスターリ（ゆっくり）の国。すべて時間で正確に動く日本とは正に逆です。初の来日でもあり、目を見張るものばかりであったことは、これらの表情や言動からも窺えました。しかし、ものおじすることなくカタコトの日本語を駆使。笑顔で友好の絆を結びました。

During 25-31 January of 1991, the International Federation of Library Associations and Institutions (IFLA) opened the "Asian Seminar on Library Services to the Visually Handicapped in Developing Countries." As joint hosts, we asked some members of the Nepal Association for the Welfare of the Blind to come to Japan. The purpose of this seminar was stated in the slogan, "Worldwide Literacy for Everyone in the Whole World," which became the motto of "The International Year of Literacy," thus promoting literacy for all the blind living in the developing countries of Asia. Members from the Nepal Association reported that literacy is still below 30% in their country among all people. Moreover, they complained that in the capital of Kathmandu, there are no library facilities for the blind, and no system for the dissemination of information to the blind. They called for financial support to build a braille library in Nepal.



当協会点字出版局を見学するNAWB幹部

チャイナ・タウンのチャリティ・ウォーク

Charity walk, public relations

1990年11月3日(土)、横浜市立港中学校で「神奈川チャリティ・ウォーク」が開かれました。私たちがこの催しに、ボランティアを募って参加し、同時に開催されたフリーマーケットで、募金の呼びかけ、テレホンカードの販売、チラシの配布、他の民間海外援助団体(NGO)との情報交換などを行いました。

会場は、横浜中華街の入り口に面しており、うらかな秋日和であったため家族連れでことのほかにぎわいました。



余っているテープレコーダーを お譲りください



日本では、今や視覚障害者の必需品となっているカセット・テープレコーダーが、ネパールでは高価であるため盲人に行き渡らず、非常に困っています。

書籍を点字に翻訳・複製するためには高価な製版・印刷設備が必要で、しかも熟練したスタッフの膨大な労力が要ります。しかし、同じ内容をカセットに収録する作業と複製は、レコーダーさえあれば比較的簡単にできます。もちろん、教科書などは点字でなければ困りますが、カセットで充分な本もたくさんあるのです。

そこで、もしあなたが既に使わなくなったカセット・レコーダーをお持ちでしたら、ネパールの盲人のために譲り願いたいのです。完全に動くカセット方式のレコーダーであれば、メーカー、型番は問いません。

ご援助賜りますよう、お願い致します。

海外援護活動記録

(1990/4-1991/4)

- 90年6月 * 創立40周年記念テレホン・カード頒布。
- 8月 * CBRセンター建設打ち合せ及び点字製本技術指導のため担当者ネパールを訪問。
(8/26-9/6)
- 10月 * 事務局担当、野崎泰志から佐々木秀明に交代。
* ネパール盲人福祉協会会長にDr. ウパディア就任。前会長Dr. プラサド相談役に。
(10/8)
- * CBRセンター建設に対し、外務省NGO補助金助成決定。
(10/25)
- * 香港リハビリテーション協会にバラCBRの中間報告書提出。
- 11月 * 「神奈川チャリティ・ウォーク」に参加。広報活動を行う。
(11/3)
- * 「愛の光通信NO-5」を発行。
- 12月 * CBRセンター地鎮祭出席及び打ち合せのため井口理事他2名がネパールを訪問。
(12/15-25)
- 91年1月 * IFLLAアジアセミナー参加のため、ネパール盲人福祉協会副会長ルバケティ氏、事務局長バハディ氏来日。
(1/22-30)
- 2月 * CBR活動のためのバイク・ホンダ125XL現地カレーヤに到着(丸紅基金助成)。
- 4月 * CBRセンター落成式出席及び技術指導のため担当者2名がネパールを訪問。眼科機材など持参。
(4/19-30)
- * NHK教育テレビ「明日の福祉」に「アジアで広がるCBR」をテーマに担当者が出演。ネパールにおける当協会の活動が紹介される。
(4/25, 4/29)



就学を待つ盲児童(ナラヤニ県バラ郡)

「ナマステ！（こんにちわあ！）」待ち構えたように土壁造りの家から勢いよく登場したのは、17歳の少女。白杖は竹製である。カメラを構える隙も与えないほどの速さで歩きはじめ、10メートル先の共同井戸でバケツに水を汲み、引き返して水牛に水をやる。飼葉を切り刻む。表情は生き生きとし、はつらつさと自信が漲っている。

人口1900人のこの村に視覚障害者は2人。彼女は10歳の時、外傷が原因で失明した。以来、水汲みなどの家事手伝いをしていたが、8カ月の訓練を終了後の現在は、水牛の世話を中心に家事労働の25%をこなしている。水牛の面倒を見るのが大好きという彼女は、あかるい性格でスタッフの惚れ込みぶりでも大変なものだ。いま、結婚相手を探しているという。障害者を疎んじる社会の壁を跳ね除けて真の意味での自立ができるかどうか、彼女自身にとってもスタッフにとってもこれからが正念場に違いない。

カウンセリング・訓練による成果

私たちは、バラCBRの実態を把握するため、1991年4月24日から26日の3日間、バラ郡のフィールド・ワークを実施。訓練を受けている16名の視覚障害者（児）を個別訪問した。

訓練前は1人でトイレに行くこともできなかった55歳の男性。農作業の手伝いをして手間賃を貰っていたと言う。歩行・日常生活訓練を経て職業訓練に入り、現在、細縄を編む仕事を得て自立している。スタッフが最初の材料を貸し与え、縄の編み方を教えた。材料は1キログラムあたり5ルピー（日本円で22円くらい）。1キログラム編むのに4日間を費やすが、48ルピー（215円）で売れるという。質が良いという評判で売れゆきも上々とのこと。鮮やかな手さばきに感心する。本人は仕事が楽しいと言い、奥さんは生活が楽になったと語る。



Employment training for financial independence of the blind; rope weaving



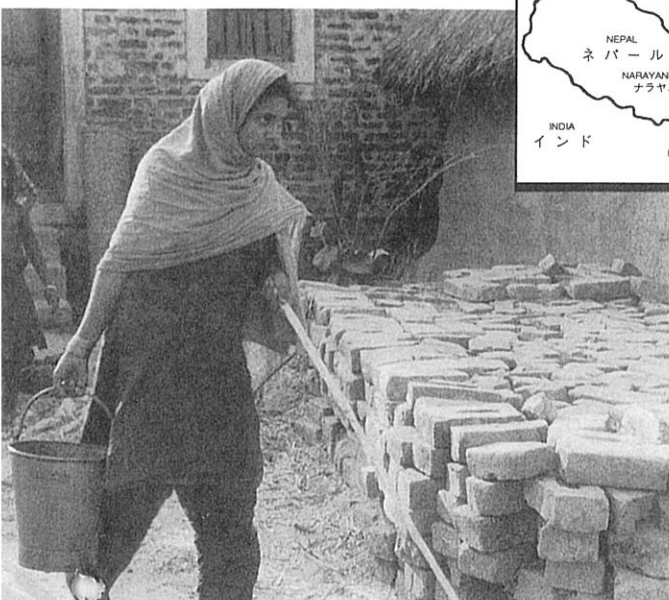
ネパール農村地帯の視覚障害 フィール

ところで、昨年、CBRの無利子貸し付け制度を利用して、カレーヤの小学校の近くに雑貨屋を開店した50がらみの男性がいる。その後の経過が知りたくて、今回再び、砂嵐と雷雨の中を訪れてみた。大分実入りが良くなったのか、お金の見分け方、数え方を披露してくれた。堂々とした店主ぶりに脱帽である。

貧困がもたらす悲劇

前述の店主は、失明と同時に、連れ合いに逃げられてしまった男性である。ネパールの、特に貧困な農村社会は、働き手が障害を持った時、その個人を悲惨な状況に陥れてしまう。

天然痘によって失明し、主婦の座を追われようとしている婦人に会った。娘が1人。新しい女性が既にその家に移り住んでいるようにみうけられた。ネパールでは、農村の女性は牛のように働かねばならないと言われる。加えて、男尊女卑の世界だ。労働力を失ってしまった主婦が、単なる厄介者として追出されてしまう現実、ネパール社会の貧困がもたらす悲劇を垣間見たような気がした。彼女は途方暮れており、歩行訓練などはしているものの、スタッフの言葉に耳を貸す余裕さえないようである。



Rehabilitation for the blind at a Nepalese rural area



ぎが植えられていた。この一軒家は作業場で、家から1.5キロほどの道のりを杖をつかずに往復していたという。彼の場合、父親の教育と指導が自立を生んだ良い例である。

CBRのなかでの視覚障害児教育

半年前にビタミンA剤を投与していれば、失明は免れたであろう5才の障害児。就学させるべく、スタッフが母親を説得しているが、父親の許しがなく、また、付き添いのできる時間的余裕もない（働かなければならないので）ということで良い返事が貰えないという。その村でも最下層のカーストらしい。

CBRには、専門の教員をカトマンズの大学で養成し、統合教育校に学齢期の障害児を就学させる重要なプログラムがある。このプログラムによって既に学校に通っている障害児もいるが、通学の手段など、難しい場合のほうが多い。ホステル（寄宿舎）の問題を含めて、緊急に解決しなければならない課題のひとつである。

フィールド・ワーカーと私の憂鬱

「薬を買うお金がない」「病院に連れて行くための交通費がない」「治療費が払えない」そして、異口同音に「水牛が欲しい（水牛は裕福の象徴）」—現地のフィールド・ワーカーは、村むらを歩くた

Recently, CBR has undertaken to provide various services for the blind in Nepal. It operates in four locations in the Kathmandu valley and three locations on the plains on the Nepal-India border. These services are supported by organizations in Canada, the U.S., Germany, UNICEF, WBU (World Blind Union) and our organization (THKA).

The location where THKA operates is south of Kathmandu, on the Nepal-Indian border, in Narayani Zone, Bara District. It is a typical tropical farming area. It is about as large as metropolitan Tokyo, with a population of about 340,000. It is an area where there are many eye ailments, particularly cataract. In June of 1989 the local committee was formed. Hiring and training the staff, as well as conducting a home survey were all begun and completed in a span of four months. The area concerned centers in the capital of Bara District, Kalaiya Town, surrounded by 22 villages where there are 14,957 households, containing 95,659 members. Among these there are 97 totally blind, 1,172 with cataracts, and 2,259 others with eye diseases. Based on these statistics, rehabilitation projects were devised. Also, in order to prevent blindness, an eye camp (for a huge number of operations on cataracts and other eye ailments) was opened. Vitamin A supplementation has also been distributed to prevent blindness due to malnutrition.

自立していた視覚障害者

コミュニティの中で、既に自立している障害者がいる。彼らは主に、失明前の仕事を、失明後もその適応力によってカバーし、集落の中で悠然と生活している。

水牛などの仲買人として生計を立てている45才の男性。白内障であったらしいがインドの呪術師によるカウチング（針で目を突き刺して白内障を治療する行為）の失敗により16年前に失明。手で牛に触りながらその牛の優劣を判断し値踏みをするのが彼の仕事である。ペアの水牛がいたので実際にやってもらったのだが、ピッタリと当ててしまい、そのキャリアに敬服。

私たちは、40度の暑さの中、2台のジープを連ねて村から村を回ったのだが、車や日本人がもの珍しいらしく、大人も子どももぞろぞろと見物にやってくる。多少癖易していた頃、車はたんばの中の一軒家を目指した。一面田畑である。ホッとて、父親と竹かごづくりを仕事にしている障害者の取材に当たった。32才の男性で、細い竹を削る作業をしている。父親が編む竹かごの材料づくりである。また、小さな畑を作っていて、そこには整然とたまね

リハビリテーション (CBR) ワーク報告



びこのような言葉を耳にし、栄養障害や眼疾患に陥っている子どもたちに目を向けざるをえない。しかもここは、彼ら自身の生まれ育った集落。自分の家も大差ないのだ。貧しさ故に失明を生んでしまう現実には彼らの熱意は掻き立てられはするものの、この現実を簡単に変えることはできない。そして彼らの憂鬱と嘆きは、私の憂鬱と嘆きでもある。

プロジェクトは今後、バラ郡全域にわたって展開される。ともあれ、私たちはCBRのなかで、他の失明予防プロジェクトと協力ながら、問題の解決に努力しなければならないだろう。(H. S)

□□□□ バラCBR活動記録 □□□□ (1990/1-1991/2)

1990年1月-4月

- *バラ郡バトラ村でアイ・キャンプ実施。
- *視覚障害者個別訪問調査。

1990年4月-7月

- *10名の視覚障害児を就学させるためのプログラムを準備する。
- *41名の視覚障害者を職業的に自立させるため、家畜の飼育、細縄編み、竹細工、雑貨店経営などのプログラムを準備する。
- *35名の視覚障害者に歩行・日常生活訓練を実施するための準備をする。
- *特殊教育方法論を学ばせるため、3名の小学校教師をトリブバン大学訓練コースに派遣する。

1990年7月-10月

- *訓練を必要としている97名の視覚障害者のうち、45名がオリエンテーション、歩行・日常生活訓練を受ける。
- *18ヵ村、263名の子どもたちに787カプセルのビタミンA剤を配付する。
- *52名の視覚障害者がカウンセリングを受ける。

1990年11月-1991年2月

- *36名の視覚障害者(児)がオリエンテーション、歩行・日常生活訓練を受ける。
- *6名の視覚障害児が正規の学校に入学する。
- *28名(44才~70才)の白内障患者が手術を受ける。
- *フィールド内の200名の栄養不足の住民に600カプセルのビタミンA剤を配付する。
- *CBRフィールドの拡大(4地区を追加)に伴い、新しいフィールド・ワーカーの募集に入る。

ネパールでこんなことが

私は海外は初めて。我が海外援護のプログラム・オフィサーの佐々木氏は今回で四度目。私の大いなる不安は90%程度解消。それにネパールについては、全くのゼロ・ベースでもなかったはずだったが？私を中心としてトンマな波紋が次々と・・・。

数あるトンマの中から、代表例をひとつ。

その日は土曜日、ネパールの休日だ。夕方から二人で、繁華街アッサムに出かけることにした。私は行く前から、幾分お腹の調子がよくないのに気がついていて。しかし、東京ではどこでもトイレがあり、紙の心配も無用。その感覚が抜けず、ティッシュ・ペーパーも持たずに出かけてしまった。ネパールでは空き地さえあれば、砂をチョイチョイとかけておけばよいなどという話も聞いていた。ところでアッサムに出て5分もしないうちに急にガマンが出来なくなった。さあ、アキチだ！アキチだ！幸い繁華街にも格好のアキチがあった。佐々木氏にティッシュ・ペーパーを借りて、周りを見渡すと妙齢の女性がベランダで本を読んでいるではないか。ダメダ！まわりの笑いを耳にしながら佐々木氏のいう通りの向うの学校をめざし、ティッシュ・ペーパーを握りしめて必死に走った。学校の守衛さんにワケを話すと、トイレは50m以上向うにあると指さす。また、私は走りに走った。やっとトイレにたどりついたら水洗がこわれていて汚物が流れていない。しかし、私の生理的欲求は極限に達していた。

佐々木氏がお礼として守衛さんにタバコをあげてくれたおかげで、手洗水を出してくれたが汚くて洗えなかった。あまったティッシュ・ペーパーを佐々木氏に返そうとしたが、彼はどうしても受取ろうとはしなかった。

後で聞いたところによると、その学校は男子禁制の女子大だったとのこと。ネパールの日本人には快挙だとホメラレマシタが、私はその日が土曜休みでなかったらと思うと複雑な気持ちだった。(松下明)



1990年度事業報告

1. 農村リハビリテーション (CBR)

ネパール王国南部、インド国境沿いに広がる肥沃なタライ平野に位置するナラヤニ県バラ郡で、1989年6月にスタートしたCBR事業は、昨年度までに現地実行委員会(ローカル・コミッティ)を組織し、スタッフの採用、訓練を経て、1990年1月から4か月間にわたり、視覚障害者が住む全戸の訪問調査を完了した。調査対象地域は、バラ郡の郡庁所在地カレーヤ町周辺の22カ村(14, 759世帯、95, 659人)で、その中から視覚障害者97人、白内障患者1, 172人、その他の眼疾患患者2, 259人、合計3, 528人をリストアップし、個人別のファイルを作成した。

平成2年度は、この調査結果を踏まえて、視覚障害者が個々に置かれている状況にきちんと対応できるように、カウンセリング、オリエンテーション、歩行訓練、日常生活訓練などを行った。この結果、雑貨店を営みはじめた視覚障害者、統合教育校に入学した盲児、水牛の世話をはじめた盲婦人など、着実にその成果をあげている。

また、白内障患者などの眼疾患患者には、アイ・キャンプが組織された時に引率し手術等を受けさせた。そして、18カ村263名の子供達に787カプセルのビタミンAを配布し失明を予防。併せてその地域コミュニティの人々に対して、基礎的医療知識を啓蒙した。

これらの事業と平行して、カレーヤ町の町役場の隣接地に、現地の強い要請を受けていた眼科診療所併設のCBRセンターを、現地の拠点として建設。建設地は、その地の地主が無償で提供し、建設費は、外務省NGO補助金300万円と現地コミュニティの負担金200万円によって賄われた。

昨年8月、事務局員を現地に派遣し、建設予定地を調査の上、建設計画の細部を点検。12月19日、駐ネパール日本大使館員の臨席を得て、盛大に地鎮祭を行い、突貫工事により、3月31日に完成することができた。

これにより今後バラ地域の失明予防と、視覚障害者の更生援護、福祉増進に一層弾みがつくものと期待されている。

2. ネパール点字教科書配布事業

当初ネパールに4校しかなかった統合教育校が、点字教科書配布事業により現在20校に増加し、211名の盲児が、本事業による点字教科書で学んでいる。

平成2年度は、ネパール盲人福祉協会(NAWB)付属点字出版所がそれまでに行ってきた小学校の教科書配布事業に加え、中学校の教科書も点字製版をはじめ、順次配布することができるようになった。これに伴い昨年8月に、製版・印刷機材の保守・点検と製本技術の指導のため、当点字出版局印刷課長を現地に派遣。これにより、点字教科書を製作するための技術移転は、一応完了したことになる。

3. 広報・募金活動

11月3日、横浜市立港中学校を会場に行われた「神奈川チャリティ・ウォーク」に、ボランティアを募って参加。フリーマーケットでのチラシの配布やテレホン・カードの販売、募金の呼び掛け、他のNGOとの情報交換などを行った。また、実務担当者の変更【※】などにより発行が遅れていた「愛の光通信」第5号を12月に発行し、停滞していた募金活動を集中して行った。また、協会創立40周年を記念して2枚組のテレホン・カードを発行した。

4. その他の活動

1991年1月25日より31日まで、東京大学安田講堂を主会場にして、国際図書館連盟(IFLA)のアジア視覚障害者サービスセミナーが行われた。この会議には、当協会のネパールでの共同事業者であるNAWBから副会長と事務局長(盲人)が、我々の仲介により招聘され、ネパールにおける当協会の活動を含めた報告を行った。この会議の前後には、当協会をはじめとする、都内の視覚障害者施設の見学を行い、ネパールにおける視覚障害者に対する、識字教育の重要性を痛感して帰国した。

【※】海外援護事業事務局員、野崎泰志が、昨年9月末日をもって退職したため、急遽点字出版局録音課長、佐々木秀明を後任とし兼務させることとした。

Record of CBR Activities in Bara District

January - April 1990

Eye Camp at Batara Village, Bara District;
Home Survey of Visually Handicapped.

April - July 1991

Preparation for the admission into school of 10 visually handicapped children;
Preparation for the program of training 41 visually handicapped adults to be employed and independent through the training of caring for domesticated animals, weaving rope, bamboo-work, management of a general store, and other skills;
The despatch of three special education elementary school teachers for participation in a program in Tribuvan University.

July - October 1990

45 visually handicapped selected from among 97 for whom such training is necessary, to learn walking and

mobility, and training in other daily activities;
The distribution of 787 Vitamin A capsules to 263 children in 18 villages.

November 1990 - February 1991

Training of 36 visually handicapped children: orientation, training to walk and be mobile and carry out other daily activities;
Admission of 6 visually handicapped students into a school for the blind;
Operations on 28 cataract patients (aged 44 - 70 years old);
Distribution of 600 Vitamin A capsules to 200 malnourished people in the local population;
Recruiting field workers to undertake new data collection as a result of expansion of the CBR field (addition of four districts).

1990年度会計報告

自 1990年4月1日
至 1991年3月31日

海外事業

収入の部			支出の部		
科 目	金 額	摘 要	科 目	金 額	摘 要
協賛金収入	1,621,800	毎日写真ニュース 唐沢国雄、蓼胡競 芝田熊雄 他175件	事務費		
募金収入	1,987,758		賃金	280,000	
			旅費	127,210	
			一般物品費	0	
			印刷製本費	244,161	
			会議費	101,890	
			役務費	342,639	
			借科損科	266,232	
			雑費	391,247	
			事業費		
販売収入	2,727,200	テレホンカード 預貯金利子他	海外援護費	202,158	
雑収入	90,905		海外出張費	539,510	
			テレホンカード 製作費	3,869,455	
			次年度へ繰越	7,262,293	
前年度より繰越	7,199,132				
合 計	13,626,795		合 計	13,626,795	

ネパール農村プロジェクト特別会計

収入の部			支出の部		
科 目	金 額	摘 要	科 目	金 額	摘 要
助成金収入	3,000,000	ODA	海外援護費	6,573,333	
寄付金収入	0		海外出張費	1,570,242	
雑収入	320,160				
前年度より繰越	7,357,910		次年度へ繰越	2,534,495	
合 計	10,678,070		合 計	10,678,070	

寄付者ご芳名 (50音順・敬称略)

自 1990年4月1日
至 1991年3月31日

青木 貞子	大坪 清子	鞍谷 清孝	蓼 胡競	本間 一夫
青柳 勇	大西 礼子	黒崎 久	田中 茂	三浦 綾子
阿川 弘之	大星 ハマ子	桑原 五男	田中 亮治	三浦 清
秋岡 義之	大溝 清志	弘誓社	田中 嘉一	水野 方子
秋元 武雄	大本 貞堅	経営ビセツ谷口	田邊 秀雄	南 博
秋山 恭子・俱子	岡部 好子	香磁	谷内 正史	峯岸 隆美
浅倉 久志	尾形 梅幸	肥塚 隆	谷川 俊太郎	御正 牧子
浅田 きよか	尾上 梅幸	小堀 光弘	田伏 淳一郎	御本 正
芦田 淳	小川 喜道	小森 愛子	玉谷 都千恵	宮 和子
有光 勤	小河 静	近藤 文郷	千田 耕基	三宅 正太郎
飯田 深雪	小沢 隆	後藤 良一	辻 三郎	宮澤 辰雄
飯田百貨店宮本町店	小野 日央	三枝 礼子	坪川 靖彦	宮原 満寿男
五十嵐 信敬	OMGAE SOOK	酒井 宣子	津山 直一	武蔵野女子学院生徒会
イクバル サヒラ	折戸 正明	坂入 操	寺島 アキ子	村松 弘一
池田 義明	柏原 信明	坂本 明弘	照井 博	村山 敏行・知子
池田 富夫	片桐 武昭	佐古井 貞行	外山 雄三	望月 真光
石井 桃子	勝又 誠子	佐藤 久夫	鳥居 伊都	森 雄士
石井 元一郎	加藤 二郎	佐藤 利村	鳥山 由子	森村 誠一
石川 昌宏	加藤 芳郎	芝田 熊雄 (関西電気)	中島 章	森本 哲郎
石川 尚代	金澤 康子	澁谷 有教	中村 和子	両角 征吾
石川 はな	金杉 克之	清水 文雄	中山 弘子	諸藤 フサ子
市角 一雄	金森 なを	白井 雅人	長井 市右	柳家 小三治
伊藤 一男	金子 照子	信和ハウス工業	長島 達也	藪内 清
伊藤 ゆき	鐘紡若里自由学院	鈴木 又五郎	長瀬 弘	山口 節子
伊藤 啓子	香山 千加子	鈴木 伸幸	新阜 義弘	山本 静夫
井村 恵津子	唐沢 国雄	砂賀 忠彦	新田 忠男	山本 昇
巖谷 大四	川上 勲	曾根崎 和人	野田 ひろし	山本 俊雄
内山 武	川中修一法律事務所	曾野 綾子	野呂 郁子	湯川 れい子
エアメールサービス	河野 康徳	高坂 正堯	波照間 千代子	湯田 立子
遠藤 義一	川野 楠巳	高田 好胤	橋本 三郎	吉田 旬
大芦 明	北浦 滋夫	高橋 源氏	端山 智弘	米田 昌徳
大内 三良	木塚 泰弘	高橋 昇造	檜山 寿子	若林 弘子
大浦 健一	岐阜盲学校高等部生徒会	高橋 輝雄	藤井 清光	渡辺 薫
大城 立裕	久保 義介	高松キワニスクラブ	藤井 誠司	渡辺 直明
大谷 宗太	汲田 冬峯	竹下 京子	藤江 幾太郎	渡辺石油

協賛者ご芳名 (50音順・敬称略)

自 1990年4月 1日

至 1991年3月31日

会津中央病院
 青森明の星短大
 青森米穀卸(株)
 赤城村
 アキ音楽事務所
 秋枝病院
 アサヒビール
 麻布教育センター
 味の素(川崎工場)
 アスモ
 我孫子市
 有賀 信勇
 有栖川スタジオ
 栗津農協
 井坂 啓
 石谷建設工業
 日津建材
 伊豆箱根鉄道
 市川瓦斯
 伊藤製作所
 伊藤忠燃料
 伊東カントリークラブ
 伊奈町
 猪苗代町
 茨城ヤナセ
 茨城県食料販売
 インタークエスト
 植田 まさし
 上野運輸商会
 栄光進学会
 江差信金
 江尻 隆
 NEC. 拓陸
 日ノ本カントリークラブ
 日ノ本カントリークラブ
 大井製作所
 大川設計
 大久保歯車工業
 大倉建設
 王子製紙
 大瀬運輸
 大橋サービス
 (株)大林組
 岡三証券
 岡田不動産
 (株)オカハシ
 奥飛白山観光(株)
 忍野村社協
 小田原湯本 C. C.
 オリエンタル写真商事
 海外経済協力基金
 花王
 化研製業
 柏南病院
 神奈川銀行
 金子製菓
 カルビー
 カルビス食品
 川崎大師
 河津町
 河西工業
 旭角証券
 デアリウス
 鬼怒川ゴム工業
 紀文

君津学園
 九州ガス
 協同乳業
 京都西高校
 教育同人社
 キリンビール
 岐阜経済大学
 暁星国際
 暁星学園慈善会
 九段会館
 熊谷記念病院
 栗田製造所
 グローバルフーズ
 京急開発
 月桂冠
 小岩井乳業
 庚申会(龍神総宮社)
 光文書院
 光葉企業
 弘和電機
 (株)小島組
 小林コーセー
 小松ウォール
 金刀比羅宮
 コフェイナリフト
 西相信用金庫
 サウンドクラフト
 桜田病院
 笹島工業
 佐島電機
 日ノ本カントリークラブ
 参天製業
 サンド薬品
 三洋証券
 (株)四方組
 志賀町
 静岡女子高
 静岡英和女学院
 資生堂
 シチズン電子
 清水 徹
 下総町社協
 社会調査研究所
 主婦の店
 昭和電機工業
 商業労連
 昭和町
 白菊酒造(株)
 白沢電気
 信栄製紙
 神慈秀明会
 神栖町社協
 新日本食品
 順心女子学園
 潤徳学園
 スズキ新潟販売
 住友スリーエム
 駿台学園高校
 聖徳学園
 学校法人聖和学院
 瀬尾記念病院
 セキショウ
 セレモ
 セントラルスポーツ
 全域短期大学

全理連
 草月会
 相互ビルディング
 外山工業
 空知信用金庫
 ソントン食品工業
 大成証券
 太知商事
 太平洋証券
 太平洋銀行
 大鵬薬品工業
 タイヨー
 高千穂交易
 竹田工建(株)
 (株)武富士
 立川公営競技
 立川市
 立川プラインド
 田中病院
 多摩ヤクルト販売
 (株)第一スーパー
 第一企画
 第一電子工業
 ダイセル化学
 大東ガス
 大和証券
 中大大学
 中部建設(株)
 中央ビルト工業
 つくば市
 筑波支所
 鶴川高等学校
 鶴見屋商店
 (株)テイケク
 寺内 大吉
 天塩
 (株)ディーシーカード
 電気化学工業
 電源開発
 電事連
 (株)東海堂
 TOKAI
 東海
 東海金属
 東華色染化学工業
 東京専売病院
 東京トヨカクリ
 東京測範
 東京田辺
 東京ガス
 東京一橋ビル
 東武建設
 東北電力
 東北高校
 東洋エンジニアリング
 東洋水産
 東和証券
 常磐興産
 特別区競馬
 豊島園
 都 11 市競輪
 栃木県酪農協
 トット基金
 凸版印刷
 トナミ運輸

富里町
 豊栄市
 都六市競艇
 同潤会病院
 ドトールコーヒー
 内藤電誠工業
 中外製業
 中野餅店
 中丸法律事務所
 (株)中真堂
 中谷総業
 ナショナル証券
 那須ゴルフクラブ
 名幸電子工業
 奈良機械製作所
 新潟日産自動車
 新潟ダイワモータース
 (株)ニコン
 ニコン
 日栄学園
 日栄証券
 日揮情報センター
 日光証券
 日産サニー千葉販売
 日新機
 ニッセー
 日精工業機械
 日本電気無線電子
 日本ロシュ
 日本電子機械
 日本学園
 日本マネジメント
 日本証券金融
 ノーリツ
 野津漬物
 野村證券
 波崎町社協
 八洲水産
 服部セイコー
 花巻市
 浜田印刷機械
 原電子測器(株)
 万有製業
 日高カントリークラブ
 日野車体工業
 日野自動車
 ひめゆり総業
 松山食品興業
 平岡ボデー
 平塚競輪
 平間寺
 ファイザー製業
 深沢 信夫
 福岡工業大学
 藤井脳神経外科
 藤沢さいかや
 富士スーパー
 富士製作所
 フジゼロックス
 富国生命保険
 富士通化成
 富士通ゼネラル
 文化女子大学
 ベル・イン・ナショナル
 北菱電器(株)

北陸通信工業
 ホテル霞友会館
 ホリ企画
 ボーソー油脂
 ボンベルト伊勢甚
 マサカネ
 マックス
 松井証券
 松戸市
 松菱
 マツモト電器
 松本歯科大
 (株)丸う田代
 マルシンフーズ
 丸美屋食品工業
 マルメシ
 丸山記念病院
 美浦村
 三上建築事務所
 三鷹市
 三菱ビルヂング
 ミノルタカメラ
 宮下眼科医院
 (株)宮地組
 宮森 正明
 三好法律事務所
 武蔵工大
 武蔵野女子学院
 森久保薬品
 森山工業
 柳沢精機製作所
 柳津町
 山一證券
 山川工業
 山田 森一
 山田 洋行
 ヤマトヤ商会
 山梨建設業協会
 ヤマハ発動機
 ヤマビガス
 山本工務店
 (株)ユカ
 湯河カントリークラブ
 豊商事(株)
 ユニオンソー
 ユニオンソー
 横芝町
 横浜女子商業高校
 横浜丸魚
 横浜機工
 横浜エージェンシー
 横浜高島屋労組
 横山 光輝
 吉川組
 吉プロ
 よつば乳業
 立正佼成会
 レブコ(株)
 レリマン
 ロッテ労組
 ワイヤーモールド
 渡辺建設



当協会が贈った眼科機材をテストするNAWB会長
ウバディア博士（落成式にて）



CBR現地スタッフの強力な足
ホンダXL125（丸紅基金助成）

東京ヘレン・ケラー協会

創立40周年記念

オリジナルテレフォンカード

頒価2,000円（2枚セット）



ヘレン・ケラー女史のポートレートと、ヒマラヤを背景に日本の盲人がトレッキングを楽しんでいる様子をデザインした、オリジナルテレフォンカード2枚組。とりわけ女史の自筆サイン入りの写真は貴重です。本テレフォンカードの純益は、すべてネパールの盲人援護に使われます。

寄付金に対する減免税措置

東京ヘレン・ケラー協会は、所得税法施行令第215条第4項および、法人税法施行令第77条第4項にかける社会福祉法人でありますので、所得税法第78条第2項第3号および、法人税法第37条第3項の規定が適用され、当協会に対する寄付金は次の通り、寄付金控除または損金算入について税法上の特典が受けられます。

1. 個人の方が寄付をする場合は、

寄付金控除額＝（寄付金額と年間所得の25%のどちらか低い方）－1万円

2. 法人が寄付する場合は、

一般寄付の場合の損金算入限度額の2倍まで、損金算入枠が拡大されます。

編集後記

昨年は発行が極端に遅れて申し訳ない事をしたと深く後悔しております。あちらこちらの後援者から、海外援護はやめたのかと厳しいお叱りを受け、今年度は何とか早目に発行したいと職員一同張り切りました。本紙の報告でおわりいただけるかと思いますが、バラ地区での診療所建築に追い回され、多少遅れ気味ながら何とか目標に漕ぎ着けました。

お蔭さまでネパールでのCBRも、アメリカ、カナダ等と肩を並べて進行しております。ところがWBU（世界盲人連合）は援助が続かないらしく、何とか日本にそのあとを続けて欲しいとの強い要望が出ています。日本は金持ちだと思われているようですが、一協会の力だけではどうにもなりません。心ある方々にお願いして続ける様にしたいとその一念に燃えています。ネパールに愛の光を絶やさないよういっそうのご理解・ご協力をお願い致します。

（井口淳）



**TOKYO HELEN KELLER
ASSOCIATION**

Established 1950

14-4, Ohkubo 3-Chome, Shinjuku-ku, Tokyo 169 Japan

TEL: 03-3200-1310 FAX: 03-3200-2582

発行：社会福祉法人 東京ヘレン・ケラー協会
海外盲人援護事業事務局

住所：〒169 東京都新宿区大久保 3-14-4

毎日新聞社早稲田別館内

TEL 03-3200-1310 FAX 03-3200-2582

郵便振替 東京 5-91688

銀行口座 太陽神戸三井銀行新宿支店

（普）5101190